人物みのかも ❸

古井地区の農村指導者

――大畑市太郎

明治から大正にかけて、古井地区の農村指導者として、養蚕・製茶・耕地整理などの数々の事業を推進したのが大畑市太郎であった。

市太郎は嘉永四年（一八五一）十一月五日、上古井村の百姓定助の長男として誕生した。明治十一年、村に起こったある事件によって村の幹部が総辞職する事態がおこり、その収拾が、加茂郡十二小区副区長の美濃輪群次に委任された。この群次によって見出されたのが市太郎であった。群次は市太郎の識見と情熱を愛し、翌十二年、加茂郡役所の書記に就任すると、市太郎は上古井村戸長に任命された。二十七才の若さであった。

市太郎は養蚕と製茶に新しい技術を導入した。二十一年、彼は県から現物供与を得て「上古井養蚕伝習所」を開設、県からの補助を打ち切られた後も「私立上古井養蚕伝習場」としてこれを継続した。同じ頃、市太郎は上古井村茶業組合長、および西加茂製茶組合改良委員として、茶の品質の向上に努力している。

三十四年の夏のことである。東京農科大学（東大農学部）の上野英三郎助教授が学生を引率して、海津郡及び三重県の耕地整理を視察したとき、市太郎はこれに同行し、耕地整理が農業の近代化に欠くことができぬものであることを痛感し、村民にその必要性を説いた。やがて上古井の耕地整理の機は熟し、四十二年十月に創業総会が招集され、「上古井耕地整理規約」と役員が決定された。役員は組合長に市太郎、副組合長に渡辺松衛、評議員は高橋道助他四名であった。

略歴➡嘉永4年(1851)上古井村に生まれる。明治12年、27才の若さで上古井村戸長となる。明治21年、上古井養蚕伝習所を開設。同42年11月から5ヶ月間にわたり、上古井地区の耕地整理事業を指導。昭和2年、藍綬褒章受賞。昭和5年没、享年82才

十一月二十二日、いよいよ工事が開始された。作業はほとんどもっこを使い、僅かに一部、郡役所から借りたトロッコとレールが機械力として使われただけであった。

工事に参加した古老の話によると、日当は大人三十五銭で年令や作業の軽重によって格差があり、割当ての作業がすむと帰宅が許されて自宅の仕事をすることができた。また、市太郎は望遠鏡で作業をしている子どもたちの仕事ぶりを観察していて、陰日向なく働いている子どもには、次の日から楽な仕事にまわして賞揚し、日当も十四銭から十六銭へアップしたので、他の子どもたちも、よく働くようになったということである。

このようにして工事は予定より早く四十三年三月、ひとまず完了した。五か月の突貫工事であった。この耕地整理により、耕地は四一・五ヘクタールから四三・八ヘクタールと増加、米の収獲量も一割から二割の増収となった。

彼は長年の功績により、昭和二年には藍綬褒章を受けたが、五年八月七日、眠るが如く大往生をとげた。八十才であった。

こんな逸話が残っている。

ある日、市太郎が使用人と共に自家用の肥料溜を作っているところへ、ある人が通りかかって「私も肥料溜は造るとよいと思うが、何しろ十円も費用がかかるので……」といったところ、市太郎は顔色を変え、「君は作るとよいと分っとるのに金がないからといって実行せん。しかし、君が今締めている白ちりめんの帯はいくらしたのか。俺はそのような高い帯はよう買わん。なぜ君は帯を買う金で肥料溜を造らないのか。」と叱ったので、その人は大いに恥じ入ったという。

耕地整理記念碑前に立つ大畑市太郎

耕地整理の模様（高橋余一画）